

身体接触を避けた仲間と関わる大学ダンス授業の実践報告

梶ちか子, 高岡瑞季

鹿屋体育大学

キーワード: コロナ禍, 対面授業, リモート, 非接触, 映像作品創作

【要 旨】

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い, 本学も対面授業を行う場合は, 十分な感染拡大防止策を講じて実施することが徹底された. これまで身体接触を含めた仲間との関わりを大切にしてきたダンス授業においては, 多くの対策を講じる必要があった. そこで, 今年度の大学におけるダンス授業の実践事例を報告し, その授業成果について検討した.

対象授業は, 2020 年度前期のダンス授業であった. 授業場所を従来の場所の約 4 倍の広さのある場所に移し, 窓やドアを全開し, 換気を徹底した. ダンス理論の講義は, 教師のパソコン画面と学生のタブレット画面を共有して, 「密集」を避けて実施した. 実技では, 隊形や活動を工夫した上で, 仲間との関わりを常に取り入れた内容で実施した. また, グループで創作し撮影した映像を繋ぎ, 映像作品を創り Web 配信した.

その結果, 受講生は, Web を介したダンス理論の講義形式を肯定的に受け入れ, 身体接触がなかった授業内容でも仲間と関わる事ができたと感じていた. また, 映像作品創作の活動に関しても肯定的に捉えられていた. 授業者側から見た受講生の学習成果の評価も, 一定の水準に達していた可能性が高いと考えられた.

スポーツパフォーマンス研究, 13, 269-290, 2021 年, 受付日: 2021 年 1 月 6 日, 受理日: 2021 年 5 月 27 日

責任著者: 梶ちか子 891-2393 鹿屋市白水町1 chichicaco@nifs-k.ac.jp

* * * *

Dance class at a university: avoiding physical contact because of the coronavirus

Chikako Kakoi, Mizuki Takaoka

National Institute of Fitness and Sports in Kanoya

Key words: COVID-19, face-to-face classes, remote lessons,
physical distancing, creating dance videos

【Abstract】

Because of the spread of the new coronavirus infection, we made every possible effort when conducting face-to-face classes at our university to prevent the spread of

infection. In dance classes especially, where relationship with friends, including physical contact, had been valued, many special measures had to be taken. The present article reports a practical example of a dance class at a physical education university, and examines the results of the classes.

The dance class (41 students) was targeted in the first half of 2020. The practical lessons were moved to a room about four times as large as the classroom that had been used prior to the pandemic. The windows and doors were opened fully to ensure adequate ventilation. Lectures on dance theory were presented using the Cisco Webex system, that is, web conferencing, in order to avoid close contact. For teaching practical skills, formations and activities were devised that kept the students from being close to each other and yet always incorporated their relationships with their peers. In addition, videos created and shot by the students were combined into a single video that was then uploaded to the Web.

The students accepted the lectures on dance theory via the Web, and reported that they were able to interact with their peers about the content of the lessons even without physical contact. In addition, they reacted positively to the activity of creating videos. Evaluation of what the students had learned from the lessons showed that they had reached a certain level.

I. はじめに

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の拡大に伴い、日本政府は令和 2 年 4 月 7 日 (火) に 7 都府県を対象に緊急事態宣言を発出し (内閣官房, 2020a), 4 月 16 日 (木) にはその対象が全都道府県に拡大された (内閣官房, 2020b)。

このような状況下で、日本各地の大学では、様々な緊急対応を余儀なくされ、多くの大学で休講措置や遠隔授業が実施されることとなった。筆者の勤務する体育系大学 (以下、「本学」とする) においても、2020 年 3 月末に 4 月 7 日 (火) の授業開始日を 4 月 16 日 (木) に延期することが決定された (鹿屋体育大学, 2020a)。その後、全都道府県を対象とした緊急事態宣言を受け、4 月 23 日 (木) から 5 月 6 日 (水) までを休講期間とし (鹿屋体育大学, 2020b), 5 月 7 日 (木) からの授業再開については、授業は原則として遠隔授業にて開講し、対面授業を行う場合は、三つの密 (密閉, 密集, 密接) を避け、手洗いやアルコール消毒等の十分な感染拡大防止策を講じて実施することが徹底された (鹿屋体育大学, 2020c)。

本学は、体育系大学であるため、実技を伴う授業が存在する。筆者もダンス実技の授業を担当しており、前期授業の授業形態について検討する必要に迫られた。本学におけるダンス授業は、基礎的な実技力を身に付けるための関連実践科目の中に位置付けられ、平成 31 年度以降の入学生及び編入生については、中学校・高等学校の保健体育の教員免許状取得に関わる必修科目となっている。そのため、授業の中止や延期は学生の履修計画に影響を及ぼすこと、また遠隔授業では、シラバスに記載した授業内容を保障することが困難であると考えられたため、感染拡大防止策を徹底した上で、対面授業を実施することとした。

文部科学省 (2015) は、教員養成課程の役割として、教員が採用当初から大きな支障が生じることなく指導実践できるようにすることが必要であり、教員としての最小限必要な資質能力を学生に身に付けさせることが重要であると示している。また、学校体育におけるダンス授業は、生徒自らが課題を発見し、解決に向けて取り組む探求型の課題解決型学習を主体として、コミュニケーション能力の育成や認め合う態度、論理的思考力を育むことをねらいとしている (村田, 2008; 高橋, 2008)。特に、ダンス学習では、他者と協働していく上で必須である、身体による非言語コミュニケーション力が不可欠とされている (酒向, 2020)。

筆者は、本学でダンス授業を担当し約 10 年となるが、この間、指導内容の検討を重ね、ICT を積極的に活用し、学生のダンス技能のみならず、指導力も向上できるよう、授業計画・内容について検討を重ねてきた (梶ほか, 2018; 梶ほか, 2019a; ; 梶ほか, 2019b; 梶ほか, 2021)。中でも、特にアクティブ・ラーニング型のグループ学習や他者との身体接触を伴う活動を重要視し、仲間と関わりながら学習内容を探求できるよう工夫してきた。

しかしながら、今年度の大学のダンス授業においては、感染拡大防止の観点から、グループ学習での密集や他者との接触を避けて授業を行う必要があったため、従来の授業方法では対応しきれず、多くの対策を講じる必要に迫られた。

そこで、感染拡大防止策を講じて実施した今年度の体育系大学におけるダンス授業の実践事例を報告し、その授業成果について検討することを目的とする。

II. 方法

1. 対象授業

対象授業は、2020 年度前期の「ダンス」授業で、受講生は 41 名(男子 22 名, 女子 19 名)であった。この「ダンス」の授業は、専門性の深化と充実を目指した「専門科目・関連実技科目」の中の選択科目に位置づけられている。3 年次以降の学生が授業選択に関するオリエンテーションを受講後に選択履修する。単位数は「1」で、全 16 コマとなる。本学のカリキュラム編成上「ダンス理論(講義)」等「ダンス」を学ぶ講義型授業は開講されていないため、この実技の「ダンス」授業が唯一の「ダンス」領域を学ぶ科目となる。受講生には、授業風景について撮影した動画及び画像についての肖像権使用について、文書及び口頭で伝えた上で同意を得た。また、授業期間は、2020 年 4 月 16 日から 8 月 13 日であった。

授業者は、筆者(体育系大学で舞踊教育・体育科教育研究に 10 年従事)であった。

2. 授業計画

授業計画を作成する際には、単元構造図を活用し(梶ほか, 2019b)(図 1-1~3), 令和 2 年度体育学部シラバス(鹿屋体育大学, 2020d)に沿って授業を実施した。令和 2 年度のシラバスの内容は、令和元年度(平成 31 年度)と同様の内容であった。また、評価については、判定基準(ルーブリック)(梶ほか, 2019b)に基づき実施した。

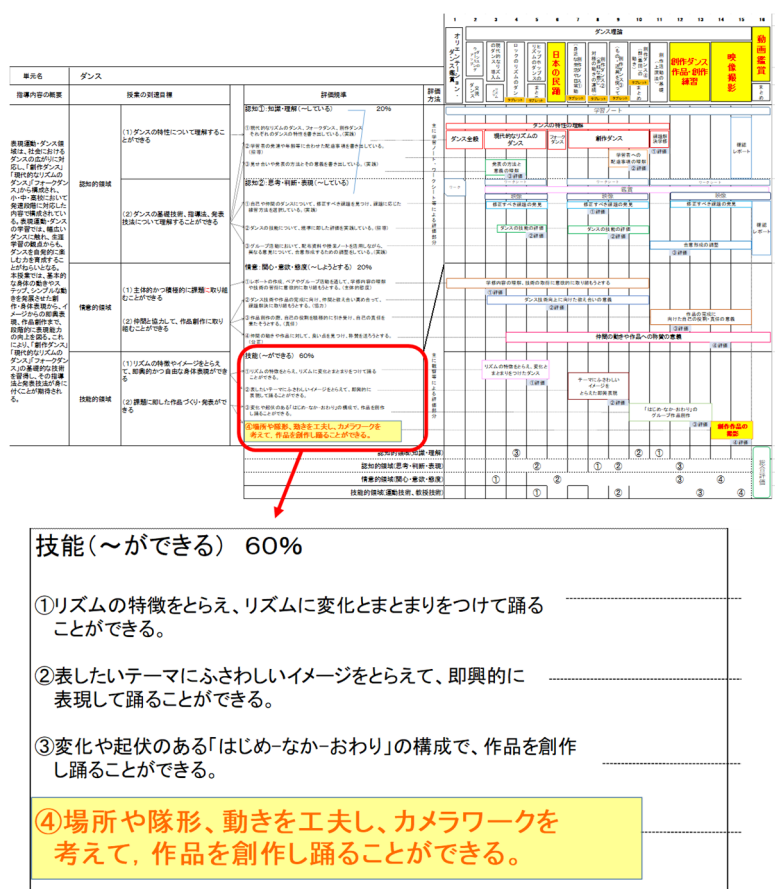


図 1-1 2020 年度「ダンス」授業の単元構造図

※ (梶ほか, 2019b)から改変した箇所を赤字で示した

※ 上部の単元構造図全体の詳細については、(梶ほか, 2019b)を参照のこと

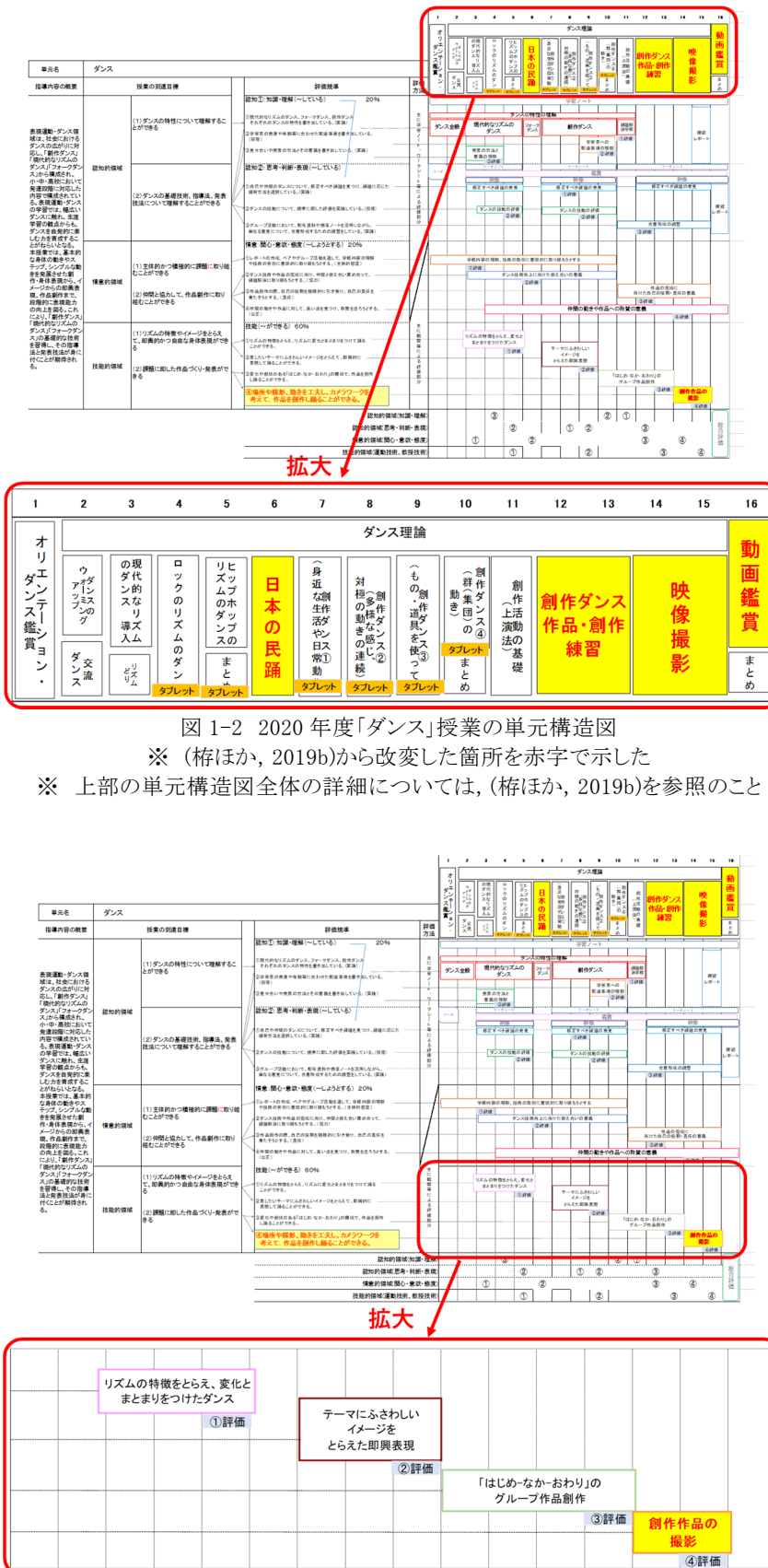


図 1-2 2020 年度「ダンス」授業の単元構造図

※ (枠ほか, 2019b)から改変した箇所を赤字で示した

※ 上部の単元構造図全体の詳細については, (枠ほか, 2019b)を参照のこと

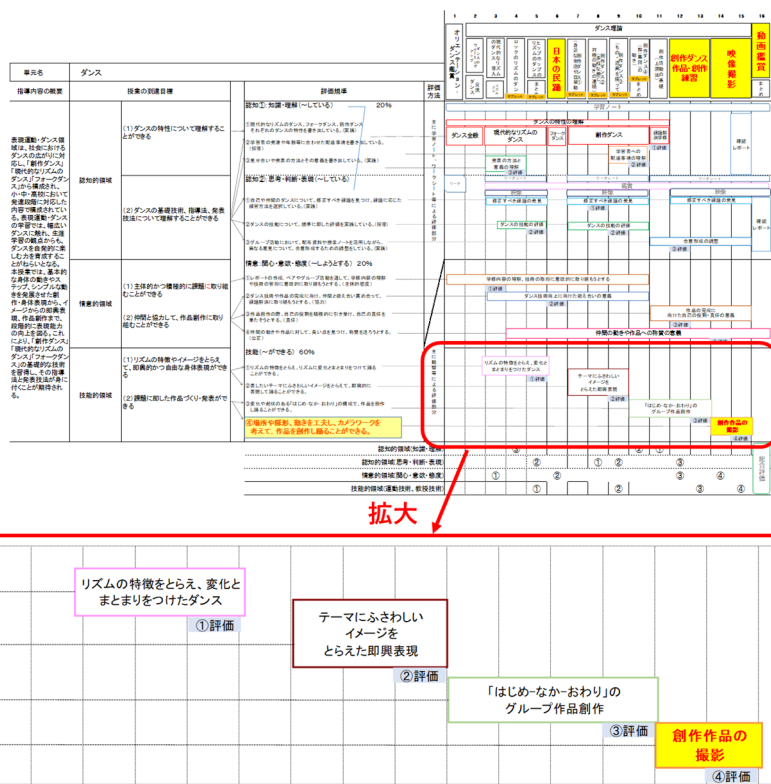


図 1-3 2020 年度「ダンス」授業の単元構造図

※ (枠ほか, 2019b)から改変した箇所を赤字で示した

※ 上部の単元構造図全体の詳細については, (枠ほか, 2019b)を参照のこと

3. 授業実践内容

以下、例年の授業と異なる授業形態・実施となった事項を中心に記述する。

(1) 授業場所

受講生の数は、例年通り約 40 名としたが、授業場所について従来ダンス授業を実施していたダンス練習室(421m²)から、約 4.2 倍の広さのある主体育室(1788m²)に変更した(図 2)。授業者は、ワイヤレスアンプのハンドマイクを用いて授業の指示等を行い、ダンスを踊る際の音楽は、主体育室付設のスピーカーを用いて流した。また、体育室のすべてのドアや窓は全開にして、「密閉」を避けた。

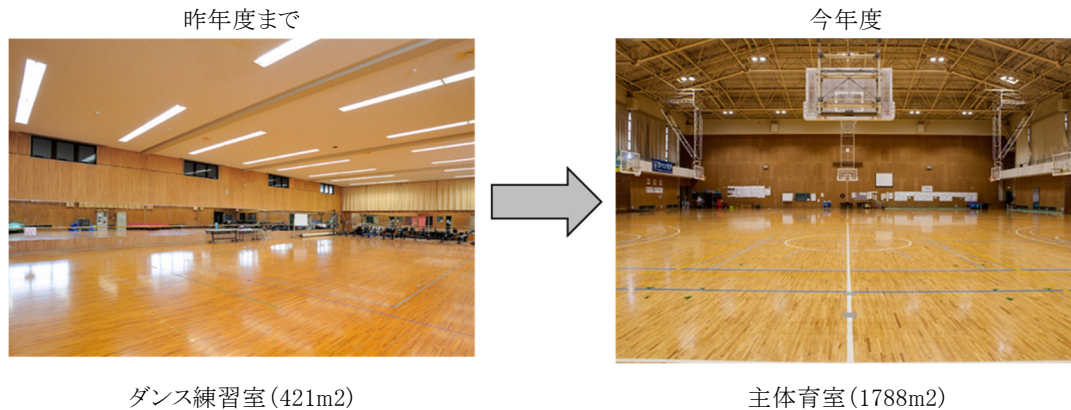


図 2 授業場所の比較

(2) 体調管理・消毒等

授業前の検温、手洗いうがい、手指消毒を授業者・受講生共に徹底させた。また、講義時や話し合い活動の際には必ずマスクを着用させた。受講生の運動時のマスク着用は、その日の気温や活動によって、受講生本人の判断に任せたが、授業者は、授業中は常にマスクを着用した。例年の授業でも気温が高い日や授業内容(活動量)によって水分補給の時間を確保していたが、今年度は、例年よりも多くの水分補給・休憩の時間・回数を設けた。また授業後にも、手洗いうがい、手指消毒、水分補給を授業者・受講生共に徹底した。

(3) 講義体制及び e-learning システム(WebClass)の活用

1 時間目のオリエンテーション及び毎時間の授業のはじめ約 15 分程度で、実施するダンス理論についての講義と本時の授業の流れの確認について、昨年度までは、ホワイトボードを用いて授業者が説明を行っていた。しかし、この体制は受講生が「密集」「密接」となるため、今年度は、受講生に各自タブレット端末(iPad)を持参させ、Cisco Webex システム^{注1)}を活用し、対面授業ではあるが、授業者のパソコン画面と学生のタブレット画面を共有して、「密集」「密接」を避けて講義を実施した(図 3)。また、昨年度までは、紙媒体で配布していた資料等を学内の e-learning システム(WebClass)に掲載し、資料配布や回収時の授業者と受講生間の接触を避けるよう努めた。さらに、創作ダンスの授業時(9 時間目)に使用した割り箸や紙、新聞紙、動きの撮影に用いたタブレット、グループ活動の際に使用したホワイトボード等の教具は学生同士での共用を避けた。

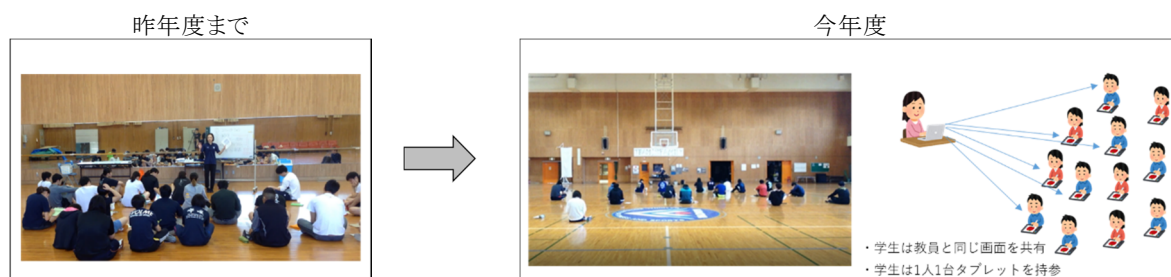


図3 講義体制の比較及び画面共有のイメージ

(4) 実技授業

ソーシャルディスタンスを意識し、学生間の間隔を十分に空けながらも、ジャンケンや挨拶、仲間の動きに対応して動く等、仲間との関わりを常に取り入れた内容で授業を実施した。現代的なリズムのダンスや創作ダンスも、授業のねらいはそのままに、「密集」「密接」を避けた内容を精査して実施した。主な取組について、以下に記載する。

・ダンスの導入(ウォーミングアップ・交流ダンス)：2 時間目に実施

円形で行うウォーミングアップは、ダンスの授業の導入として実施される典型的な運動である(村田, 2011)。心と体をほぐして楽しく学習をスタートさせるために、仲間と関わり合いながら、多様な身体感覚やコミュニケーション能力を高める上で有効であるとされている(村田, 2011)。昨年までは、身体接触を伴いながら、簡単な動きの繰り返しで身体を温めたり、股関節や足関節の柔軟性を高める運動等を行っていた(動画1)。今年度は、仲間同士の間隔を空けて、身体接触を伴うことなく、簡単な動きを繰り返したり、移動したりして身体を温め、股関節や足関節の柔軟性を高める運動等も取り入れた(動画2)。

ペアで行うストレッチについては、昨年度までは、接触を伴い、仲間と関わりながら実施した(動画3)。今年度は、ペアでの活動は実施したが、2 人の間隔を十分に空けて、向かい合ってジャンケンをして足を開いていたり、後ろ向きで捻りを加えてジャンケンをしたりと、ストレッチの機能と仲間との関わりは保障しながらも、接触を避けた方法で実施した(動画4)。

交流ダンスについては、例年は、全身でリズムに乗って弾みながら、ペアでハイタッチや両手を合わせてリズムを刻んだり、握手をする内容で、最後はダブルサークルでのペアチェンジを繰り返しながら踊り続ける内容で実施していた(動画5)。今年度は、ハイタッチする動きの箇所を、ペアの距離感は保持したまま、銃を使っの撃ち合いの模倣動作として、接触せずに仲間との動きの関わりを保障できる内容に変更して行った。撃ち合いの動きの際には、相手に動きがよりわかるよう、大きく大げさに動くよう指示をした。また、両手を合わせてリズムを刻み、握手をする動きは、「ダンス版足ジャンケン&あっちむいてホイ^{注2)}」に変更して、ここでも仲間と関わりながらも全身を使ってリズムに乗ることができる動きで行った(動画6)。

・現代的なリズムのダンス(ロックのリズムのダンス)：4 時間目に実施

フォークダンスでも活用される「グランド・チェーン」で、ペアチェンジを伴いながら、ロックのリズムのダンスの基礎的な動きである「弾み」を意識したウォーミングアップを実施した。例年であれば、ペアチェンジの際に握手をしながら移動するが(動画7)、今年度は握手ではなく、相手の目を見て、片手を挙げ

て挨拶する動きで仲間との関わりを補完した(動画 8)。学生たちには、動きの実施にあたり、移動の際も挨拶する動きの際も、常に一定の距離をとるよう意識させた。

・現代的なリズムのダンス(ヒップホップのリズムのダンス)：5 時間目に実施

ヒップホップのリズムのダンスの基本的な「縦のり」の動きのベースとなる動きを学んだ後、ペアでリーダーを決め、リーダーの動きの真似を中心に、ヒップホップのリズムに乗って、自由に動き続けるダンスを実施した。またダンスバトルの雰囲気を出すため、「あんたがたどこさ」のリズムに合わせて、一人ずつ掛け合って踊る箇所を意図的につくった。常にペア間の距離を一定に保つようにしながらも、表情やより動きを大げさにして相手に対抗するよう、学生に伝えた上で実施した(動画9)。

・フォークダンス(外国のフォークダンス, 日本の民踊)：6 時間目に実施

外国のフォークダンスの例として、「マイムマイム」と「オクラホマミクサー」を実施する予定であった。しかし、両ダンスともに必ず他者との身体接触を伴うものであり、その接触こそが外国のフォークダンスの特性であることから、今年度は外国のフォークダンスは扱わず、ダンスの動画を視聴するのみに留めた。日本の民踊は、ひとり踊りが多く、他者との身体接触がないところが特徴であることから、日本の民踊である「エイサー」「鹿児島おはら節」「鹿児島ハンヤ節」「ソーラン節」を扱った。

・創作ダンス(スポーツいろいろ)：7 時間目に実施

ペアでスポーツの動作を即興で表現し、一番表したい場面・動きを「誇張」することを主とした授業内容で行った。例年は、相手と近づいたり離れたったりして空間を変化させることも意識させたが、今年度は一定の距離を保つことを原則として、相手と距離があったとしても、相手の動きに対応して動けるよう、より動きを「誇張」し、また、上下の動きを多く入れて、全身を使って大きく動くことを意識するよう学生に伝えて授業を実施した(動画 10)。

・創作ダンス(もの・道具を使って)：9 時間目に実施

割り箸、紙、新聞紙の教具を用いて、動きの質感や大きさ等の変化の付け方を即興表現で実施した。割り箸を用いた活動はペアで行い、一膳の割り箸をお互いの人差し指で支え合う状態で動いた。その際、太い方(手で持つ部分)を持つ人と細い方(食材を掴む部分)を持つ人をあらかじめ決め、共用を避けるよう指示をした。また、繊細な動きかつ流れるような動きを意識すると共に、出来る限り腕を伸ばし、ペア間の距離を取りながら動くよう教示した。

・創作ダンス(映像作品創作)：12～13 時間目に動きづくり・作品創作, 14～15 時間目に撮影

例年、16 回目の授業時に「試験」として、大学内の講堂の舞台上で、グループで創作した作品を発表し、鑑賞し合う、「ダンス発表会」を実施していた。しかし、舞台空間は、音響や照明の関係上、必然的に「密閉」となり、また、限られた面積の舞台上において、複数名で共に踊る状態は「密接」「密集」となる。そこで、今年度は、舞台でのダンス発表会ではなく、グループで創作した動きを撮影し、その映像を編集で組み合わせ、ひとつの映像作品を創って、学内でのみ視聴が可能な Web サイト(Microsoft Stream)を用いて、配信・鑑賞するという形で代替することとした。

映像は2作品創ることとし、2曲の課題曲(ドラえもん／作詞・作曲・編曲・歌:星野源,ともに／作詞:KENTA, 作曲:WANIMA, 歌:WANIMA)を授業者側で準備した。1曲ごとに4つのグループを編成した。グループ編成の方法はくじ引きとし、グループの中でリーダーを1名決めさせた。1曲につき、授業者側でそれぞれのグループが担当する箇所を決め(図4)、各グループに自由にダンスを創作するよう指示した。

1. ともに (作詞: KENTA, 作曲: WANIMA, 歌: WANIMA)		
カウント	歌詞	担当
8×4	Ah どれだけ過去が辛くて暗くても 昨日よりも不安な明日が増えても 悩んだり泣いたりする今日も 進め君らしく 心躍る方	ともにグループ①
8×4	間奏	ともにグループ②
8×4	別れ道に立つ ともに唄う 重なる日々は変わらなず残る 干切れそうな今ほぐれ合わせ 思い出したあの頃	ともにグループ③
8×4	あたがまえのいつもの笑顔 平気なフリに何故 騙された? 何気ない一言でさえ 後悔しているいま道	ともにグループ④
8×2	出会えてよかった ありがとう (hey, hey, hey) この想いは 届け	ともにグループ①
8×4	涙こらえ笑って生きている 崩れそうになりながら毎日びびってる 疲れ果てるまで繰り返す きゅん ずっと	ユニゾン
8×4	Ah どれだけ過去が辛くて暗くても 昨日よりも不安な明日が増えても 悩んだり泣いたりする今日も 進め君らしく 心躍る方	ユニゾン
8×4	間奏	ともにグループ③
8×4.5	個々にたどり着くまでに 色んな景色をみて来たんだろう 待ち焦がれていた 出逢えてよかった ありがとう この想いは 届け	ともにグループ②
8×4	涙こらえ笑って生きている 崩れそうになりながら毎日びびってる 疲れ果てるまで繰り返す きゅん ずっと	ユニゾン
8×4.5	Ah どれだけ過去が辛くて暗くても 昨日よりも不安な明日が増えても 悩んだり泣いたりする今日も 進め君らしく 心躍る その先には幸を	ユニゾン
8×6	生きて耐えて時に壊れ泣いて迷う影に笑顔吹き誇る 生きていれば 命さえあれば 前に前に前に 上に上に 冗談じゃない まだ諦めてない 全て追い越して 何もかも置き去りに 思い描いた その先へ	ともにグループ④
8×2		

2. ドラえもん (作詞・作曲・編曲・歌: 星野源)		
カウント	歌詞	担当
8×3.5	前奏	ドラグループ①
8×4	少しだけ不思議な 普段のお話 指先と机の間 二次元	ドラグループ②
8×5	落ちこぼれた君も 出来すぎあの子も 同じ雲の下で 暮らした次元 そこに四次元	ドラグループ③
8×4.5	機械だって 涙を流して 奮えながら 勇気を叫ぶだろう だから	ドラグループ④
8×8	ここにおいでよ 一緒に冒険しよう 何者でもなくても 世界を救おう いつか 時が流れて 必ず辿り着くから 君に会えるよ ドドドドドド ドラえもん	ユニゾン
8×3.5	間奏	ドラグループ②
8×5	背中越しの過去と 輝く未来を 赤い血の流れる 今で繋ごう 僕ら繋ごう	ドラグループ④
8×4.5	弱かな君も 静かなあの子も 後の君も 誰かを救うだろう だから ここにおいでよ 一緒に冒険しよう	ドラグループ②
8×8	何者でもなくても 世界を救おう いつか 時が流れて 必ず辿り着くから 君に会えるよ ドドドドドド ドラえもん	ユニゾン
8×3.5	間奏	ドラグループ③
8×3.5	間奏	ドラグループ④
8×4.5	台風だって 心を痛めて 愛を込めて さよならするだろう	ドラグループ③
8×7	君が 通したものを 探し続けること 浮かぶ 空想から また未来が 生まれる	ドラグループ①
8×10	ここにおいでよ 一緒に冒険しよう 何者でもなくても 世界を救おう いつか 時が流れて 必ず辿り着くから 君に会えるよ ドドドドドド ドラえもん ドドドドドド ドラえもん ドドドドドド ドラえもん	ユニゾン
8×3.5	後奏	

図4 映像作品創作のグループ担当割

12～13 時間目はグループごとに動きを創作し、作品を創る活動を実施した。グループでの話し合いの際は、マスク着用を義務付け、学生間の距離を十分に取るよう指示し、グループリーダーにも徹底するよう、重ねて指導した。さらにグループにスタンド付きのホワイトボードとマーカーペンを配布した。道具の共用を避けるため、リーダーのみがマーカーペンを用いることとし、仲間の意見の記録や、グループの仲間に指示を出す際に、使用するよう指示を行った。動きを自由に考え、その後、隊形、撮影方法を考えるよう指導した(図5)。

2020 動画作成：創作シート

① グループ決め

② 役割や責任分担をする

- ・リーダー …… 全員の意見をまとめたり、練習時間の配分などを行う。
リーダーの指示のもと、振付や構成を各自考えていく。
- ☆ 全員で振付を出し合ってから良い動きを選択しても良いし、パートごとに役割分担をして、振付を考えても良い。

③ 動きを考えよう！

- ・イメージを即興的に表現したり、ひと流れの動きを意図する。
- ☆ 授業内で行った手法を思い出してみよう！ 既存のダンスをまねた意味の無い振付にならないこと！

振付や構成などのアイデアは、実際に体を動かす中で湧いてくるもの。
座り込んで考えないこと！！

振付が浮かばない場合は、テーマやイメージをもう一度確認して、そのテーマやイメージからひと流れの動き（ポーズをいくつか繋げて良い）を出し、その動きを繰り返したり、リズムを変えたり（スローモーション、ストップ動作等）、ジャンプや床を使った動きなどを入れて、発展させていく。

☑チェックポイント

- ☐ フィジカルディスタンスは維持できていますか？
- ☐ 仲間との心のディスタンスは繋がっていますか？（「人との関わり」の要素を活用）
- ☐ 歌詞を参考にイメージにふさわしい動きになっていますか？
- ☐ ひと流れの動き（動き続ける）、デフォルメ（誇張）、なりきり、全身を極限まで動かしていますか？
- ☐ メリハリ（時間・力の変化）はありますか？
- ☐ 身体の変化はありますか？

④ 隊形（空間の変化）を考えよう

⑤ 撮影の仕方を考えよう

撮影場所・撮影の角度（上から？ 下から？ 動きながら）

【約束】
 ☆ 自分たちで考えたオリジナルのダンスであること（既存の振付を真似て踊るのはNG）
 個性を生かした作品を目指しましょう！

図 5 映像作品創作の際、学生が使用した創作シート

14～15 時間目には、12～13 時間目にグループごとに創作したダンスの撮影を実施した。撮影は、大学構内であれば、どこでも可とし、屋内・屋外で、密集・密接を避けて撮影するよう、グループに指示した。撮影した動画は、Web 上のクラウドにグループごとに保存させた。

学生に保存させたグループごとの動画は、授業者（筆者）が、授業後に CyberLink Power Diewctor18 を用いて編集し、2 つの映像作品を創り、Microsoft Stream 上にアップした(図6)。



図 6 創作作品の発表方法の比較

(5) 創作作品の鑑賞・評価・振り返り: 16 時間目

16 時間目は、ダンス部の現代的なリズムのダンスを 1 作品、創作ダンスの作品を 2 作品鑑賞し、学生自身に授業で学んだ技能評価観点で評価させた。その後、Microsoft Stream 上にアップした2つの映像作品を各自のタブレットで鑑賞させ、各作品の各グループから代表者 1 名が、作品を鑑賞しての感想、意見等をマイクを用いて全体に発表した。学内の e-learning システム(WebClass) 上のアンケート機能を用いて、授業全体の振り返りを実施した。

4. 授業成果の評価方法

(1) 授業振り返りアンケート

16 回目の授業時に受講生全員を対象に「授業振り返りアンケート」を Web にて実施した。質問内容は以下の通りであった。

1. 授業前半の WebEx を利用してのダンスの講義内容について、理解できましたか？
2. 仲間との接触を避けての実技でしたが、仲間と関わる事ができたと思いますか？
3. ダンス授業において、運動量は確保できたと思いますか？
4. ダンス授業の中で、印象に残った内容(動き、教材、言葉、活動何でも)ベスト3を教えてください。
5. 最後の発表が、舞台発表ではなく、作品動画の作成となりましたが、実際に撮影し、作品動画を視聴してみてもの感想を教えてください。
6. 授業全体を通しての感想や担当教員に対してのメッセージ

問 1～3 は、5 件法(1:とてもそう思う, 2:少しそう思う, 3:どちらとも言えない, 4:あまりそう思わない, 5:そう思わない)で回答させ、問4は、3 つの□に自由記述での回答を求めた。問5・6は、自由記述とした。

問 5・問6の結果については、受講生の全ての記述を EXCEL シートに打ち込み、テキスト化した後、テキスト型データの計量的内容分析ソフトである KH Coder 3(樋口, 2004)を用いて、記述の用語数について分析を実施した。前処理を行った後、分析対象のファイルに含まれる総抽出語数(全ての語数)及び異なり語数(何種類の語が含まれているか)を抽出し、出現回数の多い頻出語を確認した。また、出現パターンが似通った語を線で結ぶ共起ネットワーク分析を行った。KH Coder の共起ネットワークでは、太い線で結ばれていると強い共起(同じセル内によく一緒に出現する)を示し、円の大きさは語の出現回数を示す。本稿では、「サブグラフ検出(modularity)」を用いて、頻出語の共起関係と、そのカテゴリ(グループ)の構成を分析した。最小出現数が 5 回以上、集計単位を「文」とし、最小スパニング・ツリーのみを強調表示する描写で、共起関係をグラフ化した。

(2) 授業者側から見た受講生の学習成果の評価

受講生の学習成果に関する評価は、判定基準(ルーブリック)に基づき、A・B・C の 3 段階で、評価規準毎に受講生数に対する人数の割合を算出した。認知的領域は Web 上で毎回実施した確認チェックやレポートから評価し、情意的領域と技能的領域は、授業時に授業者(筆者)が観察評価を実施して評価した。また、コロナ前の授業との学習成果を比較するための参考値として、昨年度と本年度分の評価規準毎の学生の到達状況に関してカイ二乗検定(IBM SPSS Statistics 25)を実施した。

Ⅲ. 結果

1. 授業振り返りアンケート

16 回目の授業時に行ったアンケートの有効回答は 40 名（1 名は入院のため欠席）であった。問1～4の結果について、図 7～10 に示す。

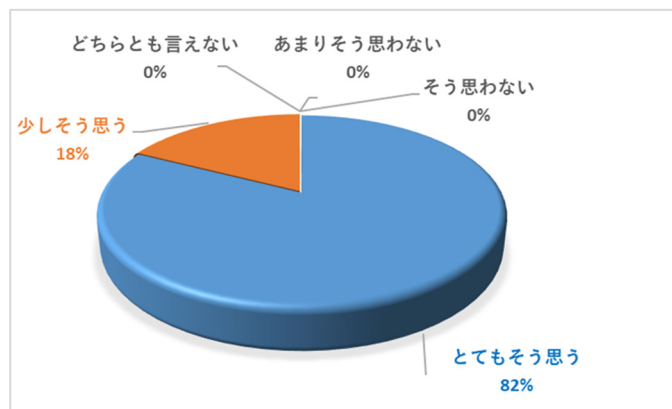


図 7 ダンスの講義内容の理解に関する回答状況
(問:授業前半の Webex を利用してのダンスの講義内容について、理解できましたか?)

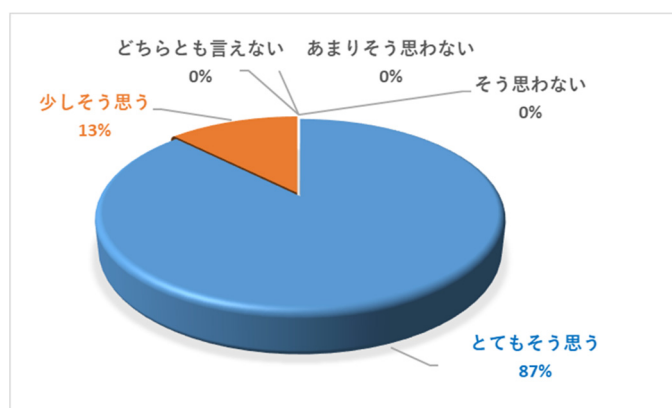


図 8 仲間との関わりに関する回答状況
(問:仲間との接触を避けての実技でしたが、仲間と関わることができたと思いますか?)

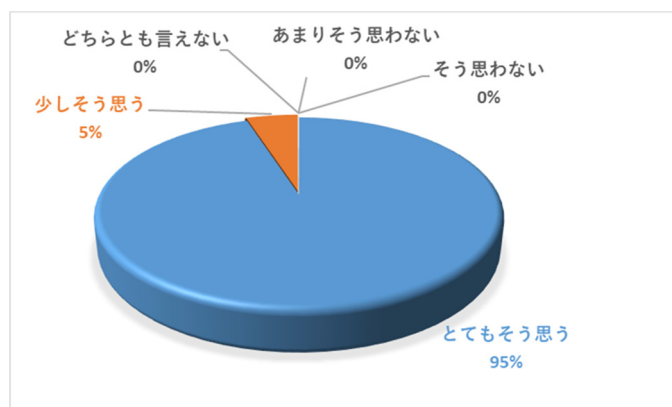


図 9 運動量の確保に関する回答状況
(問:ダンス授業において、運動量は確保できたと思いますか?)

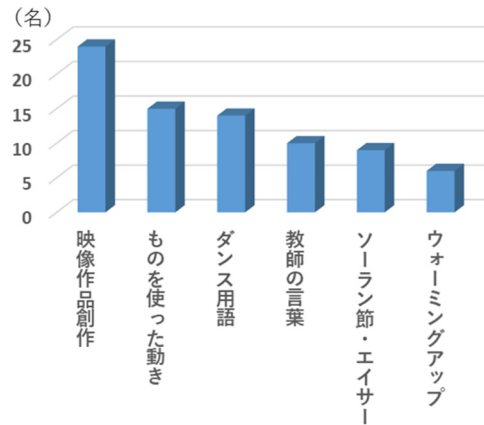


図 10 印象に残った授業内容
(問:ダンス授業の中で、印象に残った内容ベスト3を教えてください。)

授業前半の WebEx を利用してのダンスの講義内容の理解については、33 名が「とてもそう思う」、7 名が「少しそう思う」と答え、「どちらとも言えない」「あまりそう思わない」「そう思わない」と答えた受講生はいなかった。

仲間との接触を避けての授業において、「仲間と関わることができたと思うか」、の問いに対しては、35 名が「とてもそう思う」、5 名が「少しそう思う」と答え、「どちらとも言えない」「あまりそう思わない」「そう思わない」と答えた受講生は 0 名であった。

ダンス授業の運動量確保についても、38 名が「とてもそう思う」、2 名が「少しそう思う」と答え、その他の回答はなかった。

ダンス授業の中で印象に残った内容については、「映像作品創作」が 24 名と最も多く、「ものを使った動き」が 15 名、「ダンス用語(ユニゾン、カノン、シンコペーション等)」が 14 名、「教師の言葉(上手い下手じゃない、動き続けることが大事、みんなで揃えて完璧にしなくても良い、ダンスに正解はない、振りを覚えるより自由にリズムに乗ることが大事等)」が 10 名、「ソーラン節・エイサー」が 9 名、「ウォーミングアップ」に関連する内容については 6 名から回答が得られた。

問 5 の作品動画の感想に関する自由記述については、総抽出語数は 2,707 語、異なり語数は 454 語であった。助詞や助動詞のようにどのような文章の中にでもあらわれる一般的な語を除外した結果は、総抽出語数 1,035 語、異なり語数 321 語であった。これらの語のうち出現回数が多かった語は、1 位から順に「思う」「動画」「作品」「発表」「楽しい」となった。表 1 に、出現回数が 5 回以上の語を示す。また、頻出語の結びつきを明らかにするために行った共起ネットワーク分析の結果を図 11 に示す。その結果、7 つのグループに分類された(nodes31, edges30, density0.065)。「それぞれ」「視聴」「個性」「面白い」「班」「動き」「グループ」「作る」から成り立つグループ、「動画」「作品」「思う」「見る」「完成」から成り立つグループ、「自分」「残る」「人」「カメラ」「踊り」から成り立つグループ、「踊る」「撮影」「実際」「楽しい」「経験」「感じる」から成り立つグループ、「発表」「舞台」「ダンス」「残念」から成り立つグループ、「先生」「編集」「良い」から成り立つグループであった。

表 1 映像作品創作についての自由記述における出現回数が5語以上の抽出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	52	カメラ	8
動画	43	完成	7
作品	34	個性	7
発表	25	班	7
楽しい	22	それぞれ	6
ダンス	21	作る	6
良い	17	作成	6
舞台	16	残る	6
見る	15	先生	6
感じる	14	踊り	6
グループ	12	たくさん	5
撮影	11	経験	5
自分	11	残念	5
編集	11	視聴	5
人	9	実際	5
動き	9	面白い	5
踊る	9		

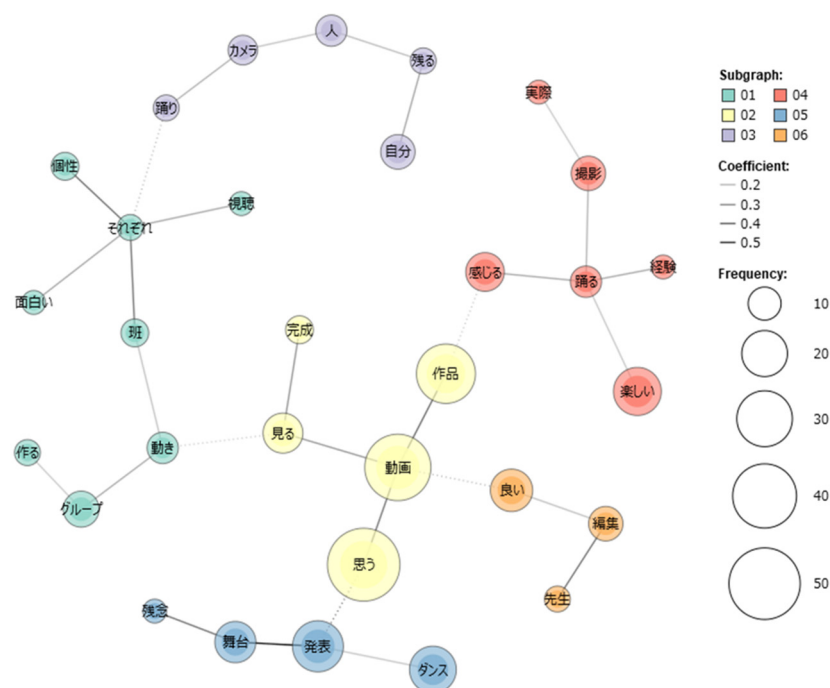


図 11 映像作品創作についての自由記述に関する共起ネットワーク

問6の授業全体の感想についての自由記述については、総抽出語数は 3,039 語、異なり語数は 534 語であった。助詞や助動詞等の一般的な語を除外した結果は、総抽出語数 1,127 語、異なり語数 381 語であった。出現回数が多かった語は、1 位から順に「授業」「ダンス」「思う」「楽しい」「先生」となった。表 2 に、出現回数が 5 回以上の語を示す。また、共起ネットワーク分析の結果を図 12 に示す。その結果、7 つのグループに分類された (nodes31, edges30, density0.065)。「授業」「先生」「楽しい」「柊」「自分」「朝」「本当に」から成り立つグループ、「動画」「編集」「最後」「踊る」「良い」から成り立つグルー

プ,「正直」「毎回」「生徒」から成り立つグループ,「苦手」「意識」「楽しむ」「行う」から成り立つグループ,「ダンス」「思う」「知識」「動き」から成り立つグループ,「大変」「違う」「今」「工夫」から成り立つグループ,「今回」「受ける」「考える」「教員」から成り立つグループであった。

表 2 授業感想についての自由記述における出現回数が5語以上の抽出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
授業	66	工夫	7
ダンス	46	朝	7
思う	44	編集	7
楽しい	35	苦手	6
先生	34	今	6
自分	14	今回	6
動画	14	毎回	6
最後	10	良い	6
動き	10	意識	5
榕	10	違う	5
大変	9	学ぶ	5
本当に	9	教員	5
楽しむ	8	考える	5
踊る	8	行う	5
		受ける	5
		正直	5
		生徒	5
		知識	5

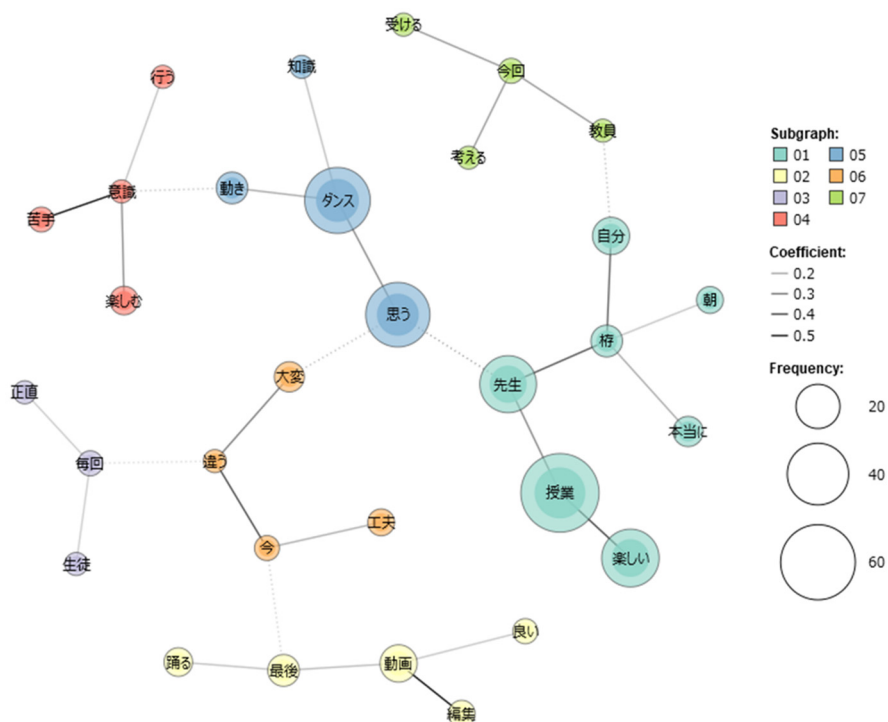


図 12 授業感想についての自由記述に関する共起ネットワーク

2. 授業者側から見た受講生の学習成果の評価

表 3・表 4 に、昨年度(受講生 38 名)と本年度分(受講生 41 名)の評価規準毎の学生の到達状況について、受講生の人数割合を示した. 認知的領域の「知識・理解」における「①現代的なリズムのダンス、フォークダンス、創作ダンス それぞれのダンスの特性を書き出している」について、今年度の方が昨年度よりも C 評価の割合が高く、カイ二乗検定において明らかな差が認められた(p=0.013). その他の項目に関しては、有意差は認められず、「情意的領域」と「技能的領域」に関しては、昨年度と比較して今年度の方が A 評価の割合が高かった.

表 3 認知的領域の評価規準毎の判定基準と受講生の評価割合

学習到達目標 の領域	評価観点	評価規準	判定基準			評価割合%						カイ二乗検 * : p < 0.05
			A	B	C	下位側() 内注人数						
						2019年度 前期	2020年度 前期	2019年度 前期	2020年度 前期	2019年度 前期	2020年度 前期	
認知的 領域	知識・理解	①現代なリズムのダンス、 フォークダンス、創作ダンス それぞれのダンスの特性を書き 出している(実証)	それぞれのダンスについて、 具体例を挙げながら特性を記載 している	それぞれのダンスについて学 習した内容を記載している	それぞれのダンスについて学 習した内容を記載していない	82.1% (32名)	87.8% (36名)	17.9% (7名)	2.4% (1名)	0.0% (0名)	9.8% (4名)	8.691
		②見せ合いや発表の方法とそ の意義を書き出している(実 証)	見せ合いや発表の仕方につい て、学習したすべての具体例 を挙げながら、その意義につ いて記載している	見せ合いや発表の仕方につ いて、具体例を挙げながら、そ の意義について記載している	見せ合いや発表の仕方につ いて、具体例や意義を記載し ていない	60.0% (23名)	56.1% (23名)	25.6% (10名)	34.1% (14名)	15.4% (6名)	9.8% (4名)	1.017
		③学習者の発達や年齢等に 合わせた配慮事項を書き出し ている(指導)	学習したすべての配慮事項に ついて具体例を挙げながら、 記載している	学習した配慮事項について 記載している	学習した配慮事項について記 載していない	71.7% (28名)	75.6% (31名)	12.8% (5名)	14.6% (6名)	15.4% (6名)	9.8% (4名)	0.594
	思考・判断・表現	①自己や仲間のダンスにつ いて、修正すべき課題を見 つけて、課題に応じた練習方 法を選択している(実証)	自己や仲間のダンスの課題に ついて、具体的な課題に指し 換し、適切な練習方法を選 択している	自己や仲間のダンスの課題に ついて指し換し、適切な練習 方法を選択している	自己や仲間のダンスの課題を 発見できず、課題をもって 練習できていない	61.5% (24名)	68.3% (28名)	35.9% (14名)	26.8% (11名)	2.6% (1名)	4.9% (2名)	0.952
		②ダンスの技術について、 規準に即した評価を実践し ている(指導)	技術評価規準に即して、具 体的な評価観点を示しながら、 評価を実践している	技術評価規準に即して、評 価を実践している	技術評価規準に即した評価 ができていない	76.9% (30名)	79.3% (33名)	12.8% (5名)	6.1% (3名)	10.3% (4名)	14.6% (6名)	0.933
		③グループ活動において、 配布資料や授業ノートを 活用しながら、異なる意見 について、合意形成するた めの調整をしている(実証)	資料やノートを活用しな がら、改善点やその根拠を 挙げるなどとして、具体的 な方策を見つけて、グルー プ間の意見を調整している	資料やノートを活用しな がら、グループ間の意見を 調整している	資料やノートを活用しな がら、グループ間の意見を 調整できていない	61.5% (24名)	78.0% (32名)	35.9% (14名)	17.1% (7名)	2.6% (1名)	4.9% (2名)	3.762

表 4 情意的領域及び技能的領域の評価規準毎の判定基準と受講生の評価割合

学習到達目標の領域	評価観点	評価規準	判定基準			評価割合%						カイ二乗検定 * : p < 0.05
			A	B	C	下位側() 内注人数						
						2019年度 前期	2020年度 前期	2019年度 前期	2020年度 前期	2019年度 前期	2020年度 前期	
情意的 領域	関心・意欲・態度	①レポートの作成、ペアやグループ活動を通して、学習内容の理解や技術の習得に意欲的に取り組もうとする(主体的態度)	学習内容の理解や技術の習得に、単元を通して、自ら進んで取り組んだりしている	学習内容の理解や技術の習得に、意欲的に取り組もうとしている	学習内容の理解や技術の習得に、意欲的に取り組む態度が見られない	56.4% (22名)	68.3% (28名)	33.3% (13名)	22.0% (9名)	10.3% (4名)	9.8% (4名)	1.398
		②ダンス技術や作品の完成に向けて、仲間と教え合い高の合って、課題解決に取り組もうとする(協働)	指示された教え合いの場に限らず、仲間と教え合い高の合って、課題解決に取り組もうとしている	指示された教え合いの場で、仲間と教え合い高の合って、課題解決に取り組もうとしている	指示された教え合いの場で、仲間と教え合い高の合って、課題解決に取り組む態度が見られない	61.5% (24名)	78% (32名)	35.9% (14名)	22.0% (9名)	2.6% (1名)	0.0% (0名)	3.182
		③作品制作の際、自己の役割を積極的に引き受け、自己の責任を果たそうとする(責任)	作品制作活動全体を通して、自己の役割を積極的に引き受け、自己の責任を果たそうとしている	自己の役割を積極的に引き受け、自己の責任を果たそうとしている	自己の役割を積極的に引き受け、自己の責任を果たそうとする態度が見られない	61.5% (24名)	78% (32名)	35.9% (14名)	22.0% (9名)	2.6% (1名)	0.0% (0名)	3.182
		④仲間の動きや作品に対して、良い点を見つけ、称賛を送ろうとする(公正)	指示された場面に留まらず単元を通して、仲間の動きや作品に対して、良い点を見つけ、称賛を送ろうとしている	指示された場面において、仲間の動きや作品に対して、良い点を見つけ、称賛を送ろうとしている	指示された場面において、仲間の動きや作品に対して、良い点を見つけ、称賛を送ろうとする態度が見られない	100.0% (39名)	100% (41名)	0.0% (0名)	0.0% (0名)	0.0% (0名)	0.0% (0名)	
技能的 領域	技能	①リズムの特徴をとらえ、リズムに変化とまとまりをつけて踊ることができる	ロックやヒップホップ等のリズムの特徴をとらえて、リズムに変化とまとまりをつけてリズムに踊ることができる	ロックやヒップホップ等のリズムの特徴をとらえて、リズムに変化とまとまりをつけて踊ることができる	ロックやヒップホップ等のリズムの特徴をとらえて、リズムに変化とまとまりをつけて踊れない	58.9% (23名)	61.0% (25名)	38.5% (15名)	39.0% (16名)	2.6% (1名)	0.0% (0名)	1.192
		②表したいテーマにふさわしいイメージをとらえて、即興的に表現して踊ることができる	表したいテーマにふさわしいイメージをとらえて、即興的に表現し感じ込めて踊ることができる	表したいテーマにふさわしいイメージをとらえて、即興的に表現して踊ることができる	表したいテーマにふさわしいイメージをとらえて、即興的に表現して踊ることができない	76.9% (30名)	92.7% (38名)	20.5% (8名)	7.3% (3名)	2.6% (1名)	0.0% (0名)	4.167
		③変化や起伏のある「はじの-なかの-おりの」の構成で、作品を創作し踊ることができる	変化や起伏のある「はじの-なかの-おりの」の構成で、作品を創作し感じ込めて踊ることができる	変化や起伏のある「はじの-なかの-おりの」の構成で、作品を創作し踊ることができる	変化や起伏のある「はじの-なかの-おりの」の構成で、作品を創作し踊ることができない	58.9% (23名)	78.0% (32名)	38.5% (15名)	22.0% (9名)	2.6% (1名)	0.0% (0名)	3.925
		④照明や衣装、音楽を工夫し、舞台上で創作した作品を思い切って身体全体で踊ることができる	照明や衣装、音楽を工夫し、舞台上で創作した作品を思い切って身体全体で感じ込めて踊ることができる	照明や衣装、音楽を工夫し、舞台上で創作した作品を思い切って身体全体で踊ることができる	照明や衣装、音楽を工夫し、舞台上で創作した作品を思い切って身体全体で踊ることができない	97.4% (38名)	92.7% (38名)	2.6% (1名)	7.3% (3名)	0.0% (0名)	0.0% (0名)	0.951

IV. 考 察

1. ダンスの認知的領域(知識・理解, 思考・判断・表現)に関する学習成果について

各時間の最初の 15 分程度を用いて毎回実施したダンス理論の講義については, ホワイトボードを使用せず, Webex を活用し, 授業者の PC 画面を共有しての講義形式をとった. 主にパワーポイント資料を用いて説明したが, ホワイトボードを用いた講義では説明し辛く感じていた内容も, アニメーションの効果や動画の挿入などを用いて比較的容易に教授することが可能となった. さらに学内の e-learning システム(WebClass)を活用したことで, 出席の確認や講義資料の配付, 授業の振り返り, 学習内容の確認等について, 学生各自のタブレット端末ひとつで全ての操作を実施することができた. この授業方法により, 学生へのプリント配付や回収の時間を削減することに繋がり, 授業展開の効率化を図ることができた. 学生が回答した授業振り返りアンケートにおいては, 「ダンスの講義内容について, 理解できましたか?」の問いに対して, 82%の学生が「とてもそう思う」, 18%の学生が「少しそう思う」と答え(図 7), Webex や WebClass を活用したダンス理論の講義形式については, おおむね好評であったと推察された. しかし, 授業者が行った判定基準(ルーブリック)に基いた到達状況については, 認知的領域の「知識・理解」における「①現代的なリズムのダンス、フォークダンス、創作ダンス それぞれのダンスの特性を書き出している」について, 今年度の方が昨年度よりも C 評価の割合が高かった(表 3). その他の「認知的領域」の項目について昨年とほぼ同様の結果であった. 昨年度と今年度では受講生も異なり, 授業方法にも違いがあるため, 安易に比較することはできないが, パワーポイント等のスライドによる提示では, 以前のスライドの記述を見返せず, 分かりにくいことがあると感じる学生もいるとの報告(勝谷, 2020)もあることから, ホワイトボードに記載したダンス理論の内容を, 授業時間のある一定時間中示し続けていることが, 知識の定着に繋がっていた可能性も考えられる. 今後も Webex や WebClass を活用したダンス理論の講義形式をベースとして, 知識の定着がより一層図れる方法を工夫していく必要があると考えられた.

2. ダンスの情意的領域(関心・意欲・態度)に関する学習成果について

本授業では, 学生同士の接触を全く行うことなく実施できる内容を検討し, またグループ活動では, ホワイトボードを活用して, 密集・密接を避けて, 大声を出さなくとも意思疎通が図れるよう工夫した. 学生自身は, 本授業の内容でも, 仲間との関わりを実感していたようであり(図 8), 身体接触のみが人との関わりの仕方ではなく, 一定の距離間隔があったとしても, 相手や仲間がいないと成り立たないような内容を多く取り入れ, 学生自身に関わりを実感させるような取り組みを行うことが重要であると考えられた. 学生の授業全体の感想においても, 「友達と触れることはなかったが, それでもみんないろいろなダンスを踊ることができた」「密を避けながらも仲間と交流ができる工夫をたくさんされていてとても楽しい授業でした」「接触ができないので, 人との関わりが難しいと思いましたが, 離れていても, 相手と関わりを持つ動きというのは, ダンスの中であるので, その点をみんなで高めることができてとても楽しかった」等の記述が見られ, 教師側の意図は, 学生側にも伝わっていた可能性が高いと考えられた. 授業者側から見た受講生の情意的領域の「主体的態度」「協力」「責任」「構成」の各項目の学習成果の評価についても, 昨年度と比較して, 大きく到達状況が落ち込んだ項目はなく(表4), 例年通りの授業の質は保障できていたのではないかと考えられた.

3. ダンスの技能的領域(技能)に関する学習成果について

(1) 現代的なリズムのダンス, 創作ダンスについて

授業者が実施した判定基準(ループリック)に基いた学習成果の到達状況については、昨年度と比較して、大きな差は認められなかった(表4)。前述した通り、学生同士が接触せず出来る内容を工夫して実施した授業であったが、現代的なリズムのダンスや創作ダンスの基礎的な技能は習得させることができたと考えられる。

また、運動量については、授業振り返りアンケートにおいて、受講生のほとんどが運動量を確保できていたと感じていた(図9)。学生の授業全体の感想においても「先生は私たちの前ではコロナ禍ではじめてソーシャルディスタンスを保ったダンスを教えるから不安と言っていましたが、最後までわかりやすく楽しくて運動量がとてもあったと思う」との記述が見られた。運動量について、学生が十分だと感じていた背景としては、授業場所を広い場所に変更したことに加え、接触できないことを逆手にとり、常にソーシャルディスタンスを維持したまま動くことを意識させたことで、仲間と接触しないよう仲間と同じペースで動かざるを得ない状況となったこと、相手と離れていることで、相手に動きが伝わりやすいように、より大きく大げさに動いたり、上下の動きを意識したり、体を大きく伸ばして動くことに意識が向いた可能性が考えられた。

(2) 映像作品創作

受講生の約6割がダンス授業の中で印象に残った内容で「映像作品創作」を挙げており(図10)、作品動画に関する自由記述においても、共起ネットワークの「踊る」「撮影」「実際」「楽しい」「経験」「感じる」から成り立つグループの実際の記述では、「実際に撮影している時は、撮影の仕方や踊り、隊形などをみんなで考えるのはとても楽しかった」「舞台発表会は、ダンス初心者の私がなかなか経験できることじゃないため、経験できなくて少し残念だったが、その分、動画撮影で、いろんな場所で踊ったり、舞台発表ではできない経験をさせてもらったのでよかった」とあり、「それぞれ」「視聴」「個性」「面白い」「班」「動き」「グループ」「作る」から成り立つグループの実際の記述においても、「色々な人と踊ったり、関わって、1つの作品を創ることはとても楽しくて、面白くて、感動することなんだと感じた」等が見られ、映像作品創作の取り組みに対し、学生は比較的肯定的に捉えていたのではないかと推察された。

また、動画作品だからこそできた取組として、共起ネットワークの「動画」「作品」「思う」「見る」「完成」から成り立つグループの実際の記述において、「作品動画の利点でもある撮影場所を変化させたり、出演人数を変えてみたりなど、変化の中で注目される人が変わるため、みんなが主役になれるチャンスがあるところが良かったと思います」「舞台発表ではできない、カメラでの色々な角度から撮った踊りが見れたのは動画作品ならではの良さだった」とあり、撮影場所を変化させたり、出演人数を変えること、ダンスをいろいろな角度から撮影できること等が挙げられた。また、「自分」「残る」「人」「カメラ」「踊り」から成り立つグループの実際の記述において、「ずっとデータは残っているんで、自分の親にも見せられるし、友達にも見せられるのでいい経験になったと思う」等が見られ、動画がデータとして残るという利点を感じている学生もいた。これは、動画の「編集」「保存」という術があるからこそ可能となった部分であり、映像作品創作ならではの利点であると考えられた。

しかし、共起ネットワークで出現した「発表」「舞台」「ダンス」「残念」から成り立つグループの記述では、「舞台発表は先輩方のものを見に行った時に楽しそうだなと思っていたので、出来なかったのは少し残念でした」「舞台発表ができなかったのは残念ですが、これも貴重な体験だと思うので励みにしていきたいです」とあり、舞台発表が実施できず残念だと感じている学生も複数存在した。一方で、「舞台発表ができなくて残念だなと思っていたが、作品動画を視聴してみて、舞台発表じゃなくて良かったなとも思ってしまうくらいいいものが出来上がっていた」「みんな舞台発表よりは緊張もなく動けていたと思います」という肯定的な意見もあった。しかし、ダンス経験者からは、「転んでも間違えても一度きりな舞台発表でしか味わえない気持ちってあると思うので、動画作品では達成感な

どで舞台発表に劣る点が多くあると思いました」との記述が見られた。また、「それぞれ」「視聴」「個性」「面白い」「班」「動き」「グループ」「作る」から成り立つグループの実際の記述においても、「動画が出来上がるまで、他の班の動きがわからなかったので、どうなるんだろうと思いましたが、どの班も、曲の雰囲気や歌詞をよく捉えて、まとまりのある作品ができて良かったと思いました」とあり、完成した動画を視聴するまで、他のグループの動きがわからず、全員でダンスをしているという感覚を実感できない部分があったと推察された。ダンスの「発表」体験は、ダンスに対するポジティブなイメージを上昇、ネガティブなイメージを低下させることが明らかとなっており(梶ほか, 2014)、近年ではレジリエンスを高める要素との関連も示唆されている(高橋, 2018)。また、ダンス発表会を通して感じられる楽しさが次のダンス活動への参加動機となること(内山, 2019)や、ダンスの公演の体験が、卒業後、現職の教員となっても様々な面で生かされている(寺山・佐藤, 2016)との報告もある。このように「ダンス発表会」の価値や効果は、周知の事実であるが、ダンス発表会で感染者集団(クラスター)が発生したという発表もあり(毎日新聞, 2020)、今回の映像作品創作の手法は、コロナ禍の対応としては、致し方なかったと考えられる。ダンス発表会の代替手段として、映像作品創作もその一つであるものの、「発表」体験に近いようなその他の方法についても、今後、検討する必要があると考えられた。

また、授業者側(筆者)が実施する学生の学習成果の評価に関しては、課題を感じた。14～15 時間の作品の撮影の時間において、学生達は学内のいろいろな場所で撮影を行ったが、授業者(筆者)が「情意的領域(14 時間目)」及び「技能的領域(15 時間目)」の観察評価を実施するにあたり、各グループが撮影している場所への移動が必要であった。363,936 m²の広大な敷地内において、4 グループが撮影している場所へ移動し、観察評価を行うことは容易ではなかった。安全面の配慮も含め、場所をある程度指定するなど、工夫が必要であると考えられた。

4. コロナ禍におけるダンス授業全体を通しての成果と課題

受講生の授業全体を通しての感想に関する自由記述においては、共起ネットワークの「授業」「先生」「楽しい」「梶」「自分」「朝」「本当に」から成り立つグループの記述において、「先生もコロナの影響でなかなか思うようにできない中、自分達が楽しくダンスに触れられる機会を工夫して作って下さり、とても楽しく学ぶことが出来ました」「コロナのこのような状況で、実技の授業を行うのは、はじめのころは私たちもどんな形で行うのか分からないし、戸惑いもありました。しかし、先生がここまで私たちのことを考えて、授業を構成してくださったことや、最後の作品発表も舞台で行えない分、動画で完成させるなど、本当に先生の思いが伝わり、自分たちもそれに応えたいと思って、授業に臨むことができました」等、コロナ禍の授業形態を肯定的に捉え、授業に参加していた様子が伺えた。「大変」「違う」「今」「工夫」から成り立つグループの実際の記述においても、「対面式で3密を避けながら授業するのは、普段の授業と違ってとても大変だったと思います。その中でも先生が工夫されながら授業をしてくださり、私たちは何不自由なく授業を受けることができてとても感謝しています」「コロナの影響で、今までと違う授業形態だったけれど、密を避けながらも仲間との交流ができる工夫をたくさんされていてとても楽しい授業でした」等があり、「ダンス」「思う」「知識」「動き」から成り立つグループの記述も「密をさけることとダンスという無理難題ではあったものの、触れ合わない動き方や、非接触を意識した知識や引き出しの多さに驚きました」等、コロナ禍での授業方法の工夫や指導法について、学生達の学びが深まっている可能性が示唆された。

当初の単元計画に基づき、シラバスに記載した目標・内容等を出来る限り変更せず、工夫を重ねて展開した全 16 回の授業であったが、新型コロナウイルス感染症の感染防止対策を講じながらも、一定の授業成果は保障できる授業が展開できた可能性が示唆された。コロナ禍で様々な制限がある中で、

特に身体接触を伴わなくても、工夫次第で、仲間との関わりは保障され、ある一定の学習成果を得ることができたことは、コロナ禍における学校体育におけるダンス授業実施に向けての布石となるであろう。今後は、この実践をもとに、コロナ禍でも小学校、中学校、高等学校等での「表現運動系・ダンス」領域の授業実践の方法について検討を重ねていきたい

V. 研究の限界

本研究は、国立の体育系大学の選択科目であるダンスの授業を対象とした単一の事例である。例年、教員免許取得希望者が多く、学習意欲の高い学生が多い。したがって、他大学や他学部、他学年の学生を対象とした授業では結果が異なる可能性がある。

また、受講生の学習成果について、判定基準(ルーブリック)に基づき、昨年度の授業の評価と比較した。しかし、前述したように、昨年度と今年度では受講生も異なり、授業場所や授業方法が異なるため、直接比較することはできない。したがって、例年通りの授業の質が維持できていたかについては、言及することができない。

さらに、学生が将来、教員として中学校や高等学校の現場で授業を実施する際、身体接触を伴うダンスの教育法や、実施できなかった外国のフォークダンス、舞台発表の企画運営・上演スキル等については、学生自身、知識や技能が身に付いていない可能性が考えられる。授業内のダンス理論の中で、昨年度実施した通常の接触を伴うダンス授業の様子や外国のフォークダンスについて動画で示したり、舞台の上演技法等についても講義は行ったが、やはり、実際の体験を伴っていないことからスキルが劣る可能性は否めない。今後は、筆者が担当する、保健体育科教育法の模擬授業等の機会を活用して、実施できなかった授業内容について補完していく必要があると考えられる。

注1) Cisco Webex は、Web 会議室システムで、インターネット経由で、複数人でのコミュニケーションが可能なツールである。本学では、講義型授業や会議等でも主として用いられている。

注2) 「ダンス版足ジャンケン&あっちむいてホイ」は、通常の足ジャンケンの「最初はグー」を「最初は回る」(一周ターンをする動作)に変更し、ジャンケンの際には、1 回 1 回、膝を胸の位置まで上げる抱え込みジャンプを経由する。また、「あっちむいてホイ」の動作は、手先の動きではなく、腕全体で上、横、下の方向を指す。筆者が考えたオリジナルの教材であり、創作ダンスや現代的なリズムのダンスの導入として、「全身を使って全力で動く」「ストップ動作の習得」「仲間と関わる」等の要素を取り入れた動きである。

文献

- ・ 樋口耕一(2004)テキスト型データの計量的分析ーの 2 つのアプローチの峻別と統合ー。理論と方法(数理社会学会), 19:101-115.
- ・ 梶ちか子・長野真弓・松崎守利(2014)ダンスの「発表」が気分・感情に及ぼす影響ー体育専攻学生を対象とした検討ー。スポーツパフォーマンス研究, 6:143-160.
- ・ 梶ちか子・松元隆秀・佐藤 豊・金高宏文(2018)体育系大学のダンス授業における ICT 活用によるダンス映像視聴・評価活動の実践ー大学 3・4 年生を対象とした授業の分析を通じてー。大学体育学, 15:31-45.
- ・ 梶ちか子・松元隆秀・金高宏文(2019a)体育系大学のダンス授業における技能評価力を高める授業

- 実践の効果ーリズム系ダンスの「技能評価観点構造図」を手がかりとしてー. 体育・スポーツ教育研究, 20:15-28.
- ・ 梶ちか子・松元隆秀・佐藤 豊・金高宏文(2019b) 大学教育における単元構造図を用いた授業設計方法の提案ー体育系大学における「ダンス」の実技授業を例にしてー. 57:17-28.
 - ・ 梶ちか子・松元隆秀・金高宏文(2021) 体育系大学のダンス授業における技能評価力を高める授業実践例ー表現系ダンスの「技能評価観点構造図」を手がかりとしてー. 九州体育・スポーツ学研究, 35:23-35.
 - ・ 鹿屋体育大学(2020a) オリエンテーション・授業日程等について.
<https://www.nifs-k.ac.jp/2020-07-22-07-17-27/2020-04-07.html> (参照日:2021 年 1 月 5 日)
 - ・ 鹿屋体育大学(2020b) 緊急事態宣言等に伴う新型コロナウイルス感染症対策について【学生・教職員向け】.
<https://www.nifs-k.ac.jp/2020-07-22-07-17-27/2020-04-21ss.html> (参照日:2021 年 1 月 5 日)
 - ・ 鹿屋体育大学(2020c) 令和 2 年 5 月 7 日からの授業再開について(通知)
<https://www.nifs-k.ac.jp/2020-07-22-07-17-27/2020-05-07.html> (参照日:2021 年 1 月 5 日)
 - ・ 鹿屋体育大学(2020d) 関連実技科目(スポーツ・武道及び体育・健康づくりに関する基礎的な実技力を身につける科目)シラバス
https://www.nifs-k.ac.jp/images/files/faculties/undergraduate/R2Syllabus/2020undergraduate3_5_09.pdf (参照日:2021 年 1 月 5 日)
 - ・ 勝谷浩明(2020) スライドを用いる数学の授業の実践の検討. 豊田工業高等専門学校研究紀要, 53: 58-63.
 - ・ 毎日新聞(2020) 計画は無観客だったが… クラスタ発生後の福島大ダンス発表会.
<https://mainichi.jp/articles/20201227/k00/00m/040/014000c> (参照日:2021 年 1 月 5 日)
 - ・ 文部科学省(2015) これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い, 高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(中央教育審議会答申)
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf (参照日:2021 年 1 月 5 日)
 - ・ 村田芳子(2008) 表現運動・ダンスの授業で身につけさせたい学習内容とは?: 学習内容と「習得・活用・探究」の学習をつなぐ. 体育科教育, 56:14-18
 - ・ 村田芳子(2011) 表現の世界にスイッチ・オン!. 村田芳子編著・指導, 新学習指導要領対応 表現運動・表現の最新指導法. 小学館, pp.52-57.
 - ・ 内閣官房(2020a) 新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言(令和 2 年 4 月 7 日発出)
https://corona.go.jp/news/pdf/kinkyujitai_sengen_0407.pdf (参照日:2021 年 1 月 5 日)
 - ・ 内閣官房(2020b) 新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の区域変更(令和 2 年 4 月 16 日発出)
https://corona.go.jp/news/pdf/kinkyujitaisengen_gaiyou0416.pdf (参照日:2021 年 1 月 5 日)
 - ・ 酒向治子(2020) 第 5 節 舞踊と教育ーSociety 5.0 で求められるダンス教育ー. 遠藤保子監修, 映像で学ぶ舞踊学ー多様な民族と文化・社会・教育から考えるー, 大修館書店, pp.32-39.
 - ・ 高橋和子(2008) なぜいま「ダンス必修化」なのか?. 体育科教育, 56:20-23.
 - ・ 高橋和子(2018) 創作ダンスの発表がレジリエンスに与える影響ー全日本高校・大学ダンスフェスティバル神戸受賞者の事例を中心にー. スポーツと人間:静岡産業大学論集, 3:83-94.

- ・ 寺山由美・佐藤菜美 (2016) 教員養成としてのダンス教育について:「筑波大学卒業ダンス公演」の事例から. 筑波大学体育系紀要, 39:71-73.
- ・ 内山須美子 (2019) ダンス学習後のダンス活動への参加に影響を及ぼす要因. 白鷗大学教育学部論集, 13:189-206.